

コチヨイという人物を、個人的にアタックしてくだき落した結果、フタをあげてみたら、自然を守る会のメンバーが多かったというワケである。

シノ鉄砲でござれ、竹トンボでござれ、竹細工何でもOKという保立さんなど、水鉄砲製作、シノ鉄砲指導、竹トンボ指導係、オミコシヤ、テントまで引き受けさせられて、まさに一人五役の超人ぶりであった。

しかし、この子どもまつりへのかかわりあいの中で、最初から最後まで、私自身「子どもまつりみたいなのをやることじたい、どこか異常でまちがっているのではないか」というむなしさと、いい年をした大人がこんなことをオッパじめようとしている、うしろめたさがつきまどってはなれなかった。

釣ってきたエビガニを堀に放って、それを子どもたち釣らせることはナンセンスであり、コッケイである。自然の中のおそびといたって、釣って来たエビガニを放したり、ブルヘどじょうを入れて、それをつかむのが何が自然なものかと思う。

一年三百六十五日のなかで、たった一日だけ自然の中のおそびまがいのことをやるのにさえ、これだけの人数の大人が、何日も時間をかけて準備しなければ出来ないとは何とも情ないし、今の子どもたちのおかれた現状

とくに、おそびの内容の貴しさは、私たちをリツ然とさせるものがあるとしても、この現状を考えると、それも当然なのではないかと思われる。

例えば、道路上のおそび一つをとっても、我々が子ども頃、道路は子どものおそび場、つまりびろばであった。陣とり、ケンケンバア、ろう石という名の石での落書き、ずいぶん色々なことをして遊んだものである。

「ホラ 自動車！」

「ホラ あぶない！」もの心がつくころからこう言われつづけて来た今の子どもたちにとって、道路は遊び場ではなくて、立入禁止の危険地帯でしかない。道路上で落書きすることなど思いもよらないのが当然であろう。

どじょうすくいにしても、こんなに子どもがよるこぶとは思わなかった。百二十キロのどじょうとフナを用意したけれど、そのどじょうの数よりはるかにたくさん人数の子どもが押しかけてしまったのである。

今、私たちが田んぼに出かけても、田のへりにどじょうやフナの姿はない。殺虫剤や除草剤で死んでしまったりするのである。ヘリコプターが散布したあとなどは、田んぼとかなり離れた小川の中でさえ、生きものは一時みられなくなってしまうという。たとえ一匹、二匹残っていたとしても、母親として、子供に安心してハダシで小